

真琴がヤクザ狩りを開始して1週間。

真琴はすでに12の拠点を潰していた頃、この町の一等地にある、田舎にしては高い、50階建てのビル。

そのビルの一室、高級住宅のような書斎部屋で、一人の男が備え付けの電話機の受話器を耳に当て電話をしていた。

「まだその女の正体は分からないのか？」

冷徹な声が部屋に静かに響く。

「はい。申し訳ありません。どうやら協力者がいるようです」

電話の相手は慎重に言葉を選びつつ、緊張気味に話している。

もし男の機嫌を損ねてしまえば、自分が殺されてしまうから。

「そうか。なら協力者を見つけろ。男なら殺せ、女なら生かして連れてこい」

「はい」

男は受話器を静かに置き、一息つき、手を組んで思考に耽け始めた

「ふう」

(まさかカメラの映像を改ざんされるとはな)

この男は真琴が狩っているヤクザの組長、佐久間 幸一（さくま こういち）。

彼はある組の組長の息子で幼いころから組長になるべく教育を受けてきた。

天性の悪のカリスマ性と頭脳、腕っぷしの強さから、幸一は父である組長が死んだあとすぐに後を継いだ。

年齢が14歳の時だ。

噂では幸一が父を殺したともされている。

幸一が組長になった後、幸一は勢力拡大を図った。

派手な抗争はなく、秘密裏の、計算され尽くした勢力拡大であり、古いヤクザは淘汰され、どんどん吸収されていった。

そうして幸一が23歳の頃、日本の裏社会を牛耳るようになった。

さらに表社会の影響も強めていき、マスコミは勿論のこと、警察上層部にも彼の息のかかったものがおり、警察は彼の言いなりになることが多くなった。

しかし、正義感の強い少数のマスコミや警察内部からの抵抗があり、計画はあと一步のところまでとん挫。裏社会の権力はそのままに、幸一は表世界から姿を消した。

そしてそいつらを潰し、再び権力を手に入れるために、ほとぼりが冷めるまで幸一は雨宮町にやってくると、暇つぶしと称して、地域の支配を開始した。

派手にするつもりはないが、雨宮町は田舎であり、どんな事件が起きても、もみ消せると思ったからだ。

(もう少しでこの町を手に入れられるはずだった)

幸一の計算ではもうすでにこの町は支配できているはずだったが、計算違いが起きた。

それが真琴の存在だ。

真琴はヤクザたちの事務所を襲う際、防犯カメラの映像などの改ざんを灯に任せており、一切、顔情報などが渡ることがなく、正体不明の敵として認識されている。

(やられた奴らの話では女だというのが.....)

幸一は人を支配することが好きだ。

(確かここは倉庫だらけの場所だったはずなんだが。灯が間違えるはずないしなあ)

真琴はどこかおかしいと思いつつも灯を信じたが、この時、真琴は灯の態度を疑うべきだった。

そうすれば、姉妹の運命はまた違ったものになったかもしれないのに……。

真琴は自宅へと帰宅した。

そう声をかけても返事はない。

真琴が階段を上がり、小夜の部屋に近づく。

すると小夜の部屋からは小夜の声が漏れていた。

そう言って真琴が小夜の部屋の前で止まると、

大きな声で喘ぐ小夜の声が聞こえた。
 どうやら部屋の中でオナニーをしているらしい。
 声からも察することができるが、結構激しくやっているらしい。

そうぼやく真琴は小夜の部屋から遠ざかり、階段を降りて行った。
小夜にとっては隠れてやっていることかもしれないが、同じ屋根の下に住んでいる姉にとってはバレバレだった。
そもそも声が大きすぎる。
もしこの家が小さい家だったら、近所にも聞こえるかもしれないと思うほど、大きな声だった。
この家でいえば、真琴は小夜の隣の部屋だし、1階にいても聞こえてくるのだ。
小夜は真琴が部屋にいるときはしないが、いないときや、就寝しているときはする。
部屋にいない時は1階で、就寝時は声が大きすぎて起きてしまい、小夜の努力虚しく、真琴も気づいてしまった、というわけだ。

「ただいまーっ!!」

と、玄関に戻って大声を出し、ドスン、ドスンと階段を上る音を大きく立てる。
そして、小夜の部屋のドアをノックする。

「小夜、いるのか?」

「う、うんっ。お帰rinaさいっ」

少し焦っている小夜の声が聞こえた。

「どっ、どうしたの? 夕飯? 御飯が炊けてから作ろうと思って」

「いや、今日もいらねえ。あ、でも少し口にしておきたいな」

時刻はすでに18時半を過ぎ、夜の帳が下りていた。

「そうなの? 少し待ってね」

そう言って小夜の部屋からティッシュと取る音が聞こえ、一分ほど経つと小夜が部屋から出てきた。

「さ、下に行きましょう」

「ああ」

真琴と小夜は1階へ行き、リビングへと向かった。

小夜はキッチンへと向かい、真琴はリビングにあるダイニングテーブルへと着く。

「最近夕飯食べないし、帰りも遅いし。何をしているの?」

小夜が残り物をレンジで温めながら、そう問いかけた。

真琴の普段の帰宅時間は17時半から18時の間。

最近はいつも18時過ぎだった。

「ん? ああ、ちょっとな。心配するな。今日で終わるよ」

「本当?」

「ああ。本当だよ。明日からはいつも通りだ」

ニッと笑うその笑顔は自信に満ちていた。

この笑顔を浮かべる時は真琴にとって全てが順調に進んでいる証だった。

だから小夜は、

「姉さんがそう言うなら信じる」

と言って、真琴に可愛らしい微笑みを向ける。

「まったく。私の妹は本当に可愛いなあ」

真琴は小夜に近づき、頭を優しくなでた。

それから真琴は温まった残り物と白飯を軽く食べ、キッチンを出て自室に戻ると、真琴は何に着替えるか悩み始めた。

「う〜ん。どれにすべきか。喧嘩しやすい服か、返り血が目立たない服か」

(少しつり目だが、顔つきは整っている。胸は……俺好みの大きさだな。揉み応えがありそうだ。脚は程よく引き締まって、それでいて若さがある。……ふむ。いい女だな。気に入っ

た)

幸一は真琴の容姿を気に入ったようだ。
どんな調教を施してやろうか、と想像しそうになるが、今はそんなことを思考するべきではないと思い、油断しそうになる心を引き締める。

(例え50対1でも.....あの女は全員をぶっ倒して俺のところに来る)

これまでの実績が容易く幸一にそう思わせる。

(時間との勝負だな)

何か策があるのか、幸一は時間を引き延ばすために会話をし始めた。

「そうだ。毘だ。誰からこの場所を教えてもらった？」

「ちっ、灯の奴。裏切ったか」

「そうだ。俺がお前を裏切らせた。女に礼儀を教え込むのは得意なんだ」

「そうかよ。で？ 灯を人質に私を捕まえようってのか？」

真琴は挑発的な笑みを幸一に向ける。

「いや。お前がこんなことで止まるとは思っていない。たかが気まぐれで助けた女如きではな」

「分かってるじゃねえか。灯は確かに私に協力してくれる奴だが、命を張って助ける奴じゃない」

「そうだろうな。お前はそういう女だろう」

幸一は真琴を見た瞬間から、そう察していた。

真琴の鋭い目。

その中にある獣の如き、野性味のある瞳は真琴が何物にも従わず、弱肉強食を是とする女だということを容易に幸一に悟らせた。

だが、そんな真琴にも弱点が存在することを幸一は知っている。

「だが、妹ならどうだ？」

「なに.....？」

幸一の一言に真琴が初めて挑発的な笑みを崩した。

そう。

真琴の弱点。

それは小夜だ。

小夜は真琴が命を捨ててでも救いたい存在。

そんな存在を人質に取られたら.....、真琴は降伏するしかない。

「妹ならどうだと言ったんだ」

「まさかテメェ.....」

「拉致らせてもらったぞ」

幸一は冷たく言い放つ。

(これは.....本当か？ 私がここに来るまでに20分くらい。攫われるには十分な時間だ。小夜にはインターフォンが鳴っても出るなどと言ったが、ガラスを割って侵入するかもしれねえ)

真琴は素早くそう予想する。
そしてすぐさま、妹を救う行動を取った。

「.....私なら殺しても構わない」

真琴は降伏の言葉を言い放つ。
そして同時に幸一を強く睨みつけながら、低い声で要求する。

「だが、小夜だけは助ける」

その言葉が予想通りだったのか、一度だけ口角を上げ、すぐに元の表情に戻した幸一は指で煙草を挟み持ち、フウと紫煙を吐いて、口を開いた。

「頭の回転が速いのはいいことだが、早とちりすなよ。お前にはチャンスをやろう。おそらく後5分もすれば妹が到着するだろう。その間に俺も含めたここにいる全員を倒すことができれば、俺はこの町から撤退することを誓おう」

幸一の言葉を聞き、訝しげに真琴は幸一を見る。

「信じられないならいいが、時間を無駄にするだけだぞ」
「くっ.....!! いいぜッ!! やってやらあッ!!」

真琴は単身、男たちの集団に突っ込んでいった。
幸一がなぜこんな回りくどいことをしたのか。
それは真琴の実力を見るためだ。
報告では全滅としか聞いておらず、防犯カメラも改ざんされたため、真琴の闘う姿を見ることができなかった。
そして今、その姿を見て決断を下す。
雌として飼うか、雌に墮としてなお、使える人材として飼うかだ。
妹はもう採用は決定してある。まだ高校1年生ながら、成績は優秀で、噂によれば三年の範囲まで学習済みだそうだ。
上手く教え込めば、秘書等として使えるだろう。

「.....合格だな」

真琴が闘う姿を見ながら、幸一がポツリと呟いた。
武力の姉と知能の妹。
思いもよらぬところでイイ駒を手に入れることができることに幸一は珍しく興奮していた。
その間にも一人、また一人と幸一の部下がぶっ飛ばされていく。

「強すぎだ」

すでに真琴の手によって40人が倒れ伏していた。
幸一が今日連れた部下は腕っぷしの強い者達だけだった。そんな彼らを5分も経たず倒す真琴を見て、

「遺伝子操作でも受けているのか、コイツは」

と呟くのは仕方のないことだった。
それほどまで、真琴の動きは苛烈かつ洗礼であった。

「堕としがいのある女だ。それでいて優秀な人材だ。ここまでの武力を持つ女が手に入るとは俺はなんて幸運なんだろうなあ」

そう言って幸一が煙草をプッと吐き捨てた。
その理由は。

「だが奴を手に入れるために、俺が人肌脱ぐことになるとはな」

闘うために準備だ。

「覚悟しろよッ!!」

幸一の眼前に真琴が、真琴の拳が迫っている。
すでに幸一の部下は全員ノックアウトしており、呻き声すら上げておらず、綺麗に気絶していた。

「オラッ!!」
「おっと、やるな」

ヒュッと風を切る音が幸一の耳に届く。
真琴の強烈な右ストレートを幸一は紙一重で避けた。

(なんて強烈なパンチだ。まともに受けたら失神するな。しかし.....見れば見るほどいい女だ)

真琴が動くたびにその豊満な胸が揺れる。
高い身長と相まって、巨乳であってもしっかりと映え、汗が灯りでキラキラと輝いている。

(欲しい)

幸一は心の底からそう思った。

(俺が女に対してこんな感情を持つとは。.....ん?)
「どうやら時間切れらしい。見てみろ」

幸一は出入口の方を指さし、真琴がその場所を見てみると、男たちに連れられた小夜がいた。

「オイッ!! 小夜を離せッ!!」

薄暗い倉庫の中に、怒号が木霊する。

「たっ、助けてっ.....!! 姉さんッ!!」

流石に小夜も、この状況には怯えており、彼女の怯えた声が真琴を不安にさせる。

「では約束通り。いや、約束を守らなくても、妹がいるからもう降参するしかないか。おい。二人、こっちに來い。こいつを眠らせろ」

二人の男が立ち尽くしている真琴に近づき、口元に布を当てに來る。

「んむっ.....!! 止めろッ!!」

「抵抗するな。妹がどうなっても知らないぞ」
「ぐっ……」

幸一の言葉に真琴は抵抗を止める。

「私には何してもいい。だが、妹には手を出すな」
「それは約束できないな。お前らは戦利品だからな」
「クソが……。地獄に堕ちろ」

真琴はなされるがまま、一切の抵抗は止めた。

「特製の薬品だ。嗅げばどんな屈強な男でも意識を失う」
「死……ね」

真琴の首が力を失い、ガクンと下がり、崩れる身体を二人の男が支える。

「姉さんッ!! 姉さんッ!!」

小夜が今まで出したことのない大きな声で呼びかけ、声が倉庫に響き渡る。

「おい。そいつも黙らせろ」
「はい」

命令を受けた男が小夜に布をあてがおうとする。

「いやっ!! 止めてっ!!」

小夜は首を振り、抵抗を示す。
命令を受けた男は思いのほか激しい小夜の抵抗に中々、小夜に布をあてがうことはできない。

「いつまでやってるんだ。貸せ」

幸一は男から布を奪う。
そして。

「黙れ」

冷たい声で幸一がそう呟くと、反対の手で小夜をパンッとビンタする。

「きゃっ!」

抵抗が弱まった瞬間に幸一は小夜の綺麗な小顔の頬を鷲掴む。

「おい。女が抵抗してんじゃねえ。……殺すぞ」

幸一の冷徹な声、自身を人間とみていない氷のような瞳を見て、あまりの恐怖に小夜がブルブルと震える。
採用が決定しているといっても、真琴ほどの興味が湧かず、幸一は一切の容赦がなかった。

「それでいいんだ」
「んごおッ……!!!」

幸一は小夜の口に布を突っ込んだ。

小夜の体内に布から薬が急速に回り、小夜は抵抗なく一瞬で意識を失う。

「行くぞ」

幸一は小夜には目もくれず、倉庫の外へ行き、真琴と小夜を連れて男たちもそれに従う。

倉庫の裏には車が何台も止まっており、その中で一番の高級車に幸一は乗り、真琴達を連れていく車以外は他の男たちが目覚めるのを待ってから帰ってくるように指示を出す。

そして、幸一を乗せた車と真琴たちを乗せた車は動き出す。これから向かう先は彼らの本拠地。

そこで彼女たちはどんな調教を受けるのか。

そのプランは全て幸一の頭の中に詰まっていた。